

■第8章 一体性——「私たち」とは共有された「私」のこと

- * 1 この章は、サイモン&シュスター社に許可をもらって、私の著書『PRE-SUASION——影響力と説得のための革命的瞬間』（2016）からいくつかの素材を組み込んだうえで改訂を加えている。内集団びいきの多方面にわたる肯定的効果の証拠については Guadagno & Cialdini (2007) を参照。その中でも特に同意に与える効果については Stallen et al. (2013) を参照。信頼については Foddy et al. (2009) と Yuki et al. (2005) を参照。援助と好意については Cialdini et al. (1997), De Dreu et al. (2015), Gaesser et al. (2020) と Greenwald & Pettigrew (2014) を参照。協力については Balliet et al. (2014) と Buchan et al. (2011) を、感情的支援については Westmaas & Silver (2006) を、許しについては Karremans & Aarts (2007) と Noor et al. (2008) をそれぞれ参照。創造性評価については Adarves-Yorno et al. (2008) を、道徳性評価については Gino & Galinsky (2012) と Leach et al. (2007) を参照。人間性評価については Brandt & Reyna (2011), Haslam (2006), Smith (2020) と Markowitz & Slovic (2020) を参照。幼児や人間以外の霊長類にも内集団びいきがあるという証拠については Buttleman & Bohm (2014), Mahajan et al. (2011), と Over & McCall (2018) を参照。
- * 2 内集団の成員間で生じるアイデンティティの認知的混同は、次のような諸傾向に見ることができる。①自分固有の性質を集団の成員たちに投影する (Cadinu & Rothbart, 1996; DiDonato et al., 2011), ②ある特徴を、以前に自分と内集団の他の成員たちのどちらに特有のものと見なしたかをあまり覚えていない (Mashek et al., 2003), ③内集団の人々と自分とを分ける特徴を挙げるのに、ほかの場合よりもずっと時間がかかる (Aron et al., 1991;

Otten & Epstude, 2006; Smith, Coats, & Walling, 1999)。自己イメージと近い他者のイメージとが曖昧になるという神経科学的な証拠は、両者が脳の前頭全皮質の同じ領域の電気回路から生まれることを示している (Ames et al., 2008; Kang et al., 2010; Cikara & van Bavel, 2014; Mitchell et al., 2005; Volz et al., 2009)。Pfaff (2007, 2015) は神経の「交差励起」という概念を導入した。他の認知的混同も、脳がまったく違った作業を行うのに、同じ構造とメカニズムを利用しているために生じるようである (Anderson, 2014)。たとえば、何かしているところを繰り返し想像すると本当にそれをやった気になるという傾向は、ある行為を実行することと、そうしていることを想像することとに関与する脳の領域が、一部重なっていることを示す研究によっていくらか説明できる (Jabbi et al., 2008; Oosterhof et al., 2012)。別の例証では、社会的拒絶を受けたときの心の痛みに、身体的な痛みを感じるときと同じ脳の領域が反応しており、どちらの場合も鎮痛剤によって苦痛が和らいだ (DeWall et al., 2010)。

- * 3 内集団の中で共有されたアイデンティティは、仲間の成員たちへの肩入れや同調と一貫して結びついているという証拠の徹底した例示は、Shayo (2020) を参照。チームの仲間に対するひいきが、チームのロボットにまで及ぶことを示す研究については Fraune (2020) を参照。「部族主義は人間の本性である」と主張した Clark et al. (2019) は、その主張に対する強い裏付けも提供している。その他 Greene (2014) も参照。また、Greene と同じく Tomasello (2020) でも、人間集団はそうした部族主義を道徳義務とすることで強化しようとしてきた、ということが論じられている。
- * 4 驚くようなことではないが、ジョー・ジラードの支持者たちは、販売実績でジョー超えを果たしたというアリ・レダの主張に

異を唱えている。しかし、レダ氏の上司（販売記録を調べられる立場にいる）は、レダ氏の言い分を支持している。ジラードとレダの間にある類似性と差異に関する有益な記事は、以下のアドレスを参照。www.autonews.com/article/20180225/RETAIL/180229862/who-s-the-world-s-best-car-salesmanand www.foxnews.com/auto/the-worlds-best-car-salesman-broke-a-44-year-old-record-and-someones-not-too-pleased。科学研究は、「私たち」らしさの共有が売上げに及ぼす好影響を裏付けている。見込み客がパーソナル・トレーニング・プログラムへの勧誘を受けたとき、担当予定のトレーナーが同じ共同体の出身者だと、入会の申し込みをする意欲が著しく高まった。同様に、歯科医療サービスプログラムへの勧誘では、見込み客に担当者になる歯科医とあなたは生まれた場所が一緒ですと伝えと、申し込み数が増加した（Jiang et al., 2010）。

- * 5 金融コンサルタントが財務不正行為に手を染める可能性が高くなるのは、オフィス内にそうした不正行為に手を染めた同じ民族に属するコンサルタントがいる場合であることを実証した研究は、Dimmock et al. (2018) を参照。会計検査官の財務的虚偽陳述に関する研究は Du (2019) を参照。インドの融資担当者と申請者の宗教的類似性が融資の承認率、融資条件、返済率に与える効果の分析は、Fisman et al. (2017) を参照。自分と同じ名前のサービス提供者相手だと、消費者がミスを許しやすくなるということについては、Wan & Wyer (2019) を参照。「落としもの」の手紙を用いたポーランドの研究（Dolinska et al., 2020）では、中規模都市のあちこち（バス停、ショッピング・モール、ATM、歩道など）100カ所に手紙が落とされ、どの場合もいちばん近い郵便ポストまでは最低250メートルあった。Michelitch (2015) によるタクシーの料金交渉の実験は、ガーナの首都アクラの中心に

ある市場の周辺数カ所で行われた。

- * 6 「ブルー」ライの科学をまとめたレポート (Smith, 2017) は、「サイエンティフィック・アメリカン・オンライン」に掲載されている。<https://blogs.scientificamerican.com/guest-blog/how-the-science-of-blue-lies-may-explain-trumps-support>。同様の発見には、人は集団との間にアイデンティティの強い共有を感じていると、集団の規範が現実と結びついていなくても、喜んで従うというものがある (Pryor et al., 2019)。党への帰属意識の強い党員は、仲間の党員の脱税を進んで隠そうとすることを示す研究 (Ashokkumar et al., 2019)、共同体の福祉に対する自党の貢献が大きいと思込むことを示す研究 (Blanco et al., 2018)、同じ党を支持する人物の治療を優先することを示す研究 (Furnham, 1966)、そして、同じ政党を支持する人物が得意ではない話題であっても、その人物の判断を受け入れることを示す研究 (Marks et al., 2019) はどれも、政党支持者の政治的決断が、多くの場合、イデオロギーよりもアイデンティティを形作っている党やその党員に対する忠誠心に基づいてなされているとする最近の諸研究と合致している (Achen & Bartels, 2017; Iyengar et al., 2012; Jenke & Huettel, 2020; Kalmoe, 2019; Schmitt et al., 2019)。こうした内集団の忠誠心に基づいた道徳という見方は、現代の政治的説得術の中心の特徴となっている (Buttrick et al., 2020)。Ellemers & van Nunspeet (2020) は、そうした内集団バイアスの発生する神経心理学的メカニズムの有益なまとめを提供している。「私たち」に基づく枠組の中で、成員たちが進んで仲間の悪行を隠蔽するのは、政党だけではない。質問を受けたとき人々は、①親しい友人や家族など近い他者の有害行為を警察に通報することに強い抵抗を示した。②通報に特に抵抗を覚えるのは、その有害行為が些細なことであるよりも重大なことであるときだっ

た（たとえば、音楽の違法ダウンロードや、じろじろ見るといった行為によるセクシャルハラスメントのときよりも、強盗や直接的なセクシャルハラスメントのときのほうが抵抗が強かった）。そして、③こうした抵抗感の理由は、自分たちの評判を守りたいという気持ちであることを認めた（Weidman et al., 2020; Hildreth & Anderson, 2018, Waytz et al., 2013 も参照）。ここからも、「私たち」が「私」を暗に示していることが分かる。

- * 7 サッカー、メジャーリーグベースボール、全米バスケットボール協会の審判による不公平な判定についての研究はそれぞれ、Pope & Pope (2015), Parsons et al. (2011), Price & Wolfers (2010) を参照。Asimov の引用 (1975) は、『テレビガイド』誌に掲載された記事より。その中で Asimov は、その年のミス・アメリカコンテストで、米国各州が自州候補に示した常軌を逸したえこひいきについて述べた。
- * 8 恋愛相手との間に抱えている問題が解決されないと健康に悪影響が出ることを実証した研究については、Shrout et al. (2019) を参照。女性の場合、2 人の間の意見の相違が未解決のままになっている時間の長さが主な原因となって、健康に悪影響が出る。男性の場合、主な原因は相違する意見の数である。男女問わず健康への影響は、16年もの長きにわたって続くことがある。パートナーシップ高揚アプローチの研究の中で私が一番気に入っているのは、Orriña et al. (2002) である。「人の行動に関する意思決定に影響を及ぼすのは（中略）、意思決定をする際に最も強く意識しているものである」という私の主張の根拠となっている研究については Cialdini (2016) を参照。
- * 9 友人間の身体活動量の関係を調べた研究（Priebe & Spink, 2011）では、調査対象者たちが自分の活動量に対する友人の影響を過小評価し、自分自身の健康や外見と結びついた要因から大き

な影響を受けたと誤解していることも分かった。フェイスブックでの投票の呼びかけについては、Bond et al. (2012) を参照。大学生の飲酒に及ぼす親友の強い影響の研究は、この効果が白人学生にもネイティブ・アメリカンの学生にも生じることを実証した (Hagler et al., 2017)。全般的に言って、友人たちはそうでない人々よりも、お互いのことを遺伝的重なりのレベルが高い相手と考えており、実際に高い (Cunningham, 1986; Christakis & Fowler, 2014; Daly et al., 1997)。

- *10 Norscia & Palagi (2011) によって集められたデータでは、人間のあくびの伝染頻度と、伝染する人とさせる人の結びつきの強さに比例関係があることが示された。同様の関係性は、あくびが音だけで伝染したときにも認められた (Norscia et al., 2020)。チンパンジー、ヒヒ、ボノボ、オオカミも、社会的絆の強さに応じてあくびが伝染しやすくなることを実証したのは、それぞれ、Campbell & de Waal (2011), Palagi et al. (2009), Demuru & Palagi (2012), Romero et al. (2014) である。種を超えたあくびの伝染についての研究は Romero et al. (2013) を参照。猫好きの皆さん、がっかりしないほしい。ネコ科の動物とその飼い主の間であくびが伝染するというデータを私が出さなかったからといって、そうしたことが起こらないわけではないかもしれない。証拠がないのは、そうした研究がまだなされていないからなのかもしれない。だとすればおそらくその理由は、猫を長時間じっと集中させておくのが難しいという点にある。だが、もし猫と人の間でもあくびが伝染すると信じたければ、この記事 (<https://docandphoebe.com/blogs/the-catvocate-blog/why-do-animals-yawn>) から元気がもらえるだろう。

- *11 ビジネス、政治、スポーツ、個人的人間関係以外にも、さまざまな人間の交流の重要な領域で、「私たち」集団のアイデンティ

ティに備わったバイアスを抱かせる効果が、同じように著しいレベルの偏りを示すことが確認されている。健康の分野では、担当医と新生児が同じ人種だと、出生時の新生児死亡率が著しく低くなる（Greenwood et al., 2020）。交通取締りでは、ボストン市警が車を止めさせたときに、警察官と運転手が同じ人種だと車内を調べずに終わる割合が上昇する（Antonovics & Knight, 2009）。イスラエルの少額請求裁判では、アラブ人の判事もユダヤ人の判事も、自分の民族集団の成員が非常に有利になる判決を下す（Shayo & Zussman, 2011）。教育分野では、教師の採点傾向に同様の効果が見られる。教師と生徒の人種、宗教、ジェンダー、民族、あるいは国籍が同じだと、生徒の授業への評価もテストの成績も良くなる（Dee, 2005）。こうしたえこひいきの、とりわけはっきりとした証拠を示しているのは、オランダの大学（マーストリヒト大学）で実施された研究である。同大学はドイツ国境の近くにあるため、学生と教師双方に、オランダ人とドイツ人が多い。学生の試験の答案を学生と同じ（あるいは違う）国籍の教師たちに無作為に割り振って採点を行わせたところ、両者の国籍が合致した場合のほうが点数が高くなった（Feld et al., 2015）。

- *12 進化論の考え方の屋台骨（個人は自己の存続以上に、自分の遺伝子のコピーを存続させようとする）のもとになっているのは、Hamilton (1964) で初めて提唱された「包括適応度」という概念であり、幾多の挑戦者たちを退けて支持され続けている（Kay et al., 2020）。生死が関係してくるような状況で、親族という関係性が持つ特に強い影響に関する証拠については、Borgida et al. (1992), Burnstein et al. (1994), Chagnon & Bugos (1979) を参照。さらに、その親族との遺伝的重なりが大きければ大きいほど（たとえば、伯父や従兄弟より親兄弟の場合のほうが）、自他の融合の感覚が大きくなることも分かっている（Tan et al.,

2015)。Telzer et al. (2010) では、家族を助けた後にティーンエイジャーの脳の報酬系が活性化しているという発見が得られている。感心するほど入念になされた「擬制家族」研究の概説については、Swann & Buhrmester (2015) と Fredman et al. (2015) を参照。別の研究では、こうした集団化促進効果への説明が提出されている。それによれば、意識の中で集団のアイデンティティを目立たせることによって、個々人が熱心にそのアイデンティティと合致する情報に注意を向けるようになり (Coleman & Williams, 2015) 【訳注：この論文は後に撤回されている】、それによって今度はその情報を、より重要と見なすようになる。Elliot & Thrash (2004) を見ると、ほとんどすべての親が子どものために行動した私の講義での事例は、決して珍しいものではない。ある心理学の講座でこの2人の研究者は、親が47項目のアンケートに答えてくれた学生に単位を一つおまけするという提案を行った。回答の回収率は96%にもなった。Stein の「ママ・アン」についてのコラム全文は <http://content.time.com/time/magazine/article/0,9171,1830395,00.html> を参照。子孫の養育を土台とした、より多様な形式での援助に関する詳細な分析については、Preston (2013) を参照。生物学、経済学、人類学、社会学、心理学の専門家は、研究結果から子どもが親に対して持つ巨大な影響力を知っているが、科学者でなくてもそれを充分理解できる。たとえば、作家はそうした影響力が持つ強い感情的な力を頻繁に描いている。Hemingway (文章を削りに削っているにもかかわらず、書き上がった散文に感情を揺さぶる強い力が宿っていることで有名な作家) には、ある賭けの逸話が残っている。Hemingway が担当編集者の一人とバーで飲んでいたとき、「誰でも理解できて深く味わうこともできる非常に劇的な物語を、単語6つだけで書けるか」という賭けをした。その物語を読んで、編

集者が納得できればその店の客全員に1杯おごり、もし納得できなければ Hemingway が同じことをする、というものだった。Hemingway はカクテルのコースターとして置かれていた四角い紙ナプキンの裏に単語を六つ書き、編集者に見せた。編集者はすぐ、静かに立ち上がってバーテンのところへ行き、店の客全員に1杯ずつ酒をふるまった。ナプキンに書かれていた言葉は、次のようなものだった。For sale. Baby shoes. Never worn. (赤ちゃんの靴売ります。未使用)。

- *13 バフエットの50周年書簡を収録した、パークシャーハサウエイの2014年年次報告書は、2015年2月からオンライン上に公開されている (www.berkshirehathaway.com/letters/2014ltr.pdf)。メッセージャーがどうしてメッセージになるのかに関する有益な解説は、この話題を扱った大変読みやすい本 Martin & Marks (2019) を参照。家族内と家族外の両方の領域で、人は類似性を使って遺伝的な重なりを判断し、似ている相手をえこひいきしている (DeBruine, 2002, 2004; Hehman et al., 2018; Kaminski et al., 2010)。家族の中でも顔が似ている人同士のほうが援助を行う意欲が高く、親しみの情も強いという現象を裏付けるデータについては、それぞれ、Leek & Smith (1989, 1991) と Heijkoop et al. (2009) を参照。操作された身体的類似性が投票に影響を与えるという証拠については、Bailenson et al. (2008) を参照。

- *14 態度の類似性は遺伝的関連性評価の土台として使われるため、内集団形成の土台にもなり、その結果、誰を援助するかという決定に影響を与えている (Grey et al., 2014; Park & Schaller, 2005)。政治的態度と宗教的態度は世代から世代へ最も受け継がれやすく、したがって、遺伝子的「私たち」を最も反映しやすいということについては、しっかりとした実証がある (Bouchard et al., 2003; Chambers et al., 2013; Hatemi & McDermott, 2012;

Hufer et al., 2020; Kandler et al., 2012; Lewis & Bates, 2010)。
 これらの態度は、非常に変化しにくいものでもある (Bourgeois, 2002; Tesser, 1993)。

- *15 人間（と人間以外の生物）が血縁を識別するのに使う合図（シグナル）の分かりやすい概説は、Park et al. (2008) を参照。そうした合図の一つが住居の共有である (Lieberman & Smith, 2012)。他人と一緒に暮らし、親が彼らの世話をしているのを見ることが、子どものその後の利他性に及ぼす効果についての説得力に富んだ証拠は、Cosmides & Tooby (2013) と Lieberman et al. (2007) を参照。杉原千畝に関して言うておくと、ある一つの事例からより広範な結論へと一般化する試みには、たとえマザー・テレサの家庭環境に関する記事で補強されているとしても、もちろん常に危険が伴う。だがこの論点については、幼児期の家庭生活で人間の多様性に触れていた同時代の有名な支援者は、彼一人でなかったということが分かっている。Oliner & Oliner (1988) はそうした歴史を発見し、ナチスからユダヤ人を^{かくま}匿ったヨーロッパの非ユダヤ人たちの例を多数収録している。また、予想されるとおり、同書の紹介する人々は、他の点では類似している同時代の非支援者たちと比べて、成長する過程で、より多様な人間集団に自分との共通性を感じていた。この拡張された「私たち」という感覚と関係があったのは、後のホロコーストの時代に彼らが下した、自分とは違う人たちを助けるという決断だけではなかった。半世紀後にインタビューが行われた時点でも、彼らが一肌脱ごうと考える相手や理念の多様性は、依然として他の人よりも広範なままだったのだ (Midlarsky & Nemeroff, 1995; Oliner & Oliner, 1988)。さらに最近になって、個人が全人類に対してどの程度まで自分と同じだと無意識のうちに考えているかを評価するパーソナリティー尺度が開発された。この重要な尺度

は、「私たち」という代名詞の使用頻度、「家族」としての他者という概念、人間一般との「自他の重なり」の認識の範囲などが測定され、その得点は、援助を必要とする他国の人々を、国際的な人道援助活動への寄付を通じて支援する意欲を予測する (McFarland et al., 2012; McFarland, 2017)。杉原が第二次世界大戦前に行った援助活動の状況要因と個人的要因に関する情報は、当時の日本とヨーロッパの状況に関する歴史研究 (Kranzler, 1976; Levine, 1997; Tokayer & Swartz, 1979) と、杉原へのインタビュー (Craig, 1985; Watanabe, 1994) を典拠としている。

- *16 強制収容所の出来事に関する Cohen の記述 (1972) の出典は、元ナチスで同収容所の守衛だった人物との会話だった。この話を聞いたとき、Cohen は奇妙な成り行きで、その人物のルームメイトだった。ル・シャンボンの人々は、Trocmé と彼の妻 Magda の指導のもと、3,500人の命を救ったと推定されている。彼が最初にやって来たユダヤ人 (Trocmé が自宅の外で凍えているその女性を見つけたのは、1940年12月のことだった) への援助を決めた理由については、簡単に明確な答えを述べることはできない。だが、大戦末期に逮捕され、お前が手を貸したユダヤ人の名前を言えとヴィシー政権の役人から迫られたとき、彼の口から（より根源的には心と世界観から）出てきた言葉は、杉原千畝のものとよく似ていた。「私たちはユダヤ人など知りません。知っているのは人間だけです」 (Trocmé, 2007/1971)。Trocmé の親戚と近所の人たちでは、どちらがより頼みを聞き入れやすかったのかという疑問に関して、他の情報源からの証拠は前者、つまり血縁関係が確かな人たちのほうが頼みを受け入れやすかっただろうということを示している (Curry et al., 2013; Rachlin & Jones, 2008)。たとえば、1990年代半ばにルワンダで起きた大虐殺の間、フツ族のツチ族に対する攻撃が隣人すらも標的としたとき、攻撃をあお

る人々は部族の仲間意識を土台にして行った。「フツ族の力」は虐殺のスローガンであり、また虐殺の言い訳にも使われたのである。各地に選挙事務所を置くという、オバマ陣営の作戦の効果の統計的分析については、Masket (2009) を参照。オバマの参謀たちがキャンペーンでこれ以外の行動科学の知見をどう使ったかに関する概説は、Issenberg (2012) を参照。人が地元の人の意見から特に影響を受けやすいという発見（たとえば、Agerstrom et al., 2016）には、「地元優勢効果」という名前がついている（Zell & Alike, 2010）。この効果を選挙の政治学に当てはめると、有権者は地元の人から選挙に行ってくれと言われたときのほうが、従う見込みが高いということになる（Nickerson & Feller, 2008）。ちなみにこの認識は、行動科学に関する大量の論文を読み込んで得られたものではなかった。Nickerson はオバマの選挙チームに、行動科学アドバイザーとして参加していたのだ。一部企業が、顧客、定額サービス利用者、フォロワーを、「○○コミュニティー」の一員と呼ぶのに気づいたことがあるだろうか。思うにこれは、他の一部企業が、会員のことを「××ファミリー」と言うのと同じ理由である。どちらもそうする狙いは、強力で根源的な「私たち」意識を利用することにあるのだ。

- *17 アンケート調査に協力する、アマゾンの商品レビューの勧めに従う、自分の州が歴史に果たした役割を過大評価する、アフガン戦争に反対する、自分の部隊から脱走する、といった行動に地域性が及ぼす効果についての証拠は、それぞれ Edwards et al. (2014), Forman et al. (2008), Putnam et al. (2018), Kriner & Shen (2012), Costa & Kahn (2008) を参照。Levine (1997) によれば、杉原のビザは1万人近いユダヤ人を救い、そしてそのほとんどが、日本の領内に避難先を見つけた。ユダヤ人を保護するという日本政府の決定前後の出来事は、数名の歴史家が書いてい

る（たとえば, Kranzler, 1976, Ross, 1994）。だが, 最も詳細に論じているのは, 東京で主任ラビを務めていた Tokayer である (Tokayer & Swartz, 1979)。本書の記述は, 私が共著者として名を連ねている教科書 (Kenrick et al., 2020) に登場する, より学術的なバージョンを加筆・修正したものである。観察力に優れた読者はお気づきかもしれないが, ホロコーストという殺人政策を扱うとき, 私は彼らにナチスという単語を使い, ドイツ人とは呼んでいない。これは, しばしばなされるようなドイツのナチス政権と同国の文化や人々との同一視が, 正確でも公正でもないと考えているためだ。何しろ私たちは, カンボジア, ロシア, 中国, イベリア半島, 米国の文化や人々を, ボル・ボトのクメール・ルージュ, 第二次世界大戦後のスターリン, 文革時代の四人組, クリストファー・コロンブスに続いた征服者たち, 思春期のアメリカの「明白なる運命【訳註: 西部開拓を正当化した19世紀の標語】」の制定者たち（このリストはまだまだ続けられる）の残虐な振る舞いと同一視してはいないのだから。政治制度は, しばしば一時的かつ強力な状況から生まれてくるため, それをもとにしてある民族を特徴づけることはできない。よって, 私はナチスが支配していた時代のドイツを論じるときは, その2つを混ぜ合わせなかった。

- *18 反応同調性が自他のアイデンティティの混同（たとえば, Milward & Carpenter, 2018; Palidino et al., 2010）といった, 一体化の感覚に果たす役割を裏付けるさまざまな種類の行動科学的データの概説は, Wheatley et al. (2012) を参照。リズムカルな音に合わせて動きを同調させるという傾向が, 私たちの進化の過程に現れたのは, 新石器時代や銅器時代よりもさらに昔のことである。チンパンジーはリズムに合わせて集団で体を揺らす, これはおよそ600万年前に生息していた人とチンパンジー共通の先

祖に、この反応が備わっていたことを示唆している (Hattori & Tomonaga, 2020)。ある研究者は、人間が動きを同調させることで集団化することを一時的な「ご近所化」と説明し、そのとき成員たちはお互いの行動に対して高いレベルの影響力を発揮すると述べた (Warren, 2018)。集団の連帯感を強めるように作られた社会的メカニズムに関する説得力のある主張は、Kesebir (2012) と Paez et al. (2015) を参照。一緒に活動することが「私たち」意識、ビデオゲームの成績、脳波パターンに及ぼす効果については、それぞれ、Koudenburg et al. (2015), von Zimmermann & Richardson (2016), Dikker et al. (2017) を参照。ここで著名な世界史の専門家、McNeill の言葉 (1995, p. 152) を紹介しよう。これは意欲的な影響力の使い手なら、同調性の一体化を促す効果から大きな利益を得られるはずであるという考え方と合致している。「リズムミカルに身体を動かしながら一緒に声を出すことは、(有意義な) 共同体を作り維持するために、人類がこれまでに思いついたさまざまなやり方の中でも、最も確実に手っ取り早く効果的な方法である」。

- *19 動きを合わせることによる同質化効果の研究は、それぞれ以下を参照。机をトントンと指で叩く (Hove & Risen, 2009)、微笑み (Cappella, 1997)、姿勢の調整 (Bernieri, 1988)。グラスの水を使った実験については Inzlicht et al. (2012) を参照。また、この研究ではもう一つ別の実験も行われ、そのときは参加者たちは、内集団 (白人) の俳優の水を飲む動きを真似するように言われた。その結果、参加者たちには白人を黒人よりも好む典型的な偏りが、いくらか強まった形で生じた。興味深いことに、動きを合わせた活動の中には、同質化効果以外の効果も生むものが一つある。何かの情報に注意を向けたときに、他の誰かと同時にそうしたと気づくと、より熱心にその情報に向かう (つまり、より大

きな認知資源を割り当てる）のだ。だが、これが成り立つのは、その別の誰かとの間に、「私たち」的關係がある場合に限られる。どうやら、近しい関係である誰かと一緒に同じものに対して注意を払うという行為は、注意を向ける対象が特別な注意を払うに値するというシグナルになっているようである（Shteynberg, 2015）。

*20 私は本文で、社会的影響力が持つ価値を測る最重要基準を「その後の行動」としたが、影響力を行使するプロセスにおいて、他者の感情（や信念、知覚、態度）を変えることの重要性を否定しているわけではない。だが、同時に私には、それらの要素に変化を生む取り組みというのは、ほぼいつもその後の行動を変えさせるために行われているように思われる。2人でリズムを刻むことの研究については Valdesolo & DeSteno (2011) を、行進に関する研究については Wiltermuth & Heath (2009) を参照。歩調を合わせての行進は興味深い訓練である。というのも、戦術的価値を失って久しいにもかかわらず、今も軍隊訓練に採用されているからだ。2つの実験から、これについて説得力のある理由が得られている。一緒に同調的な行動をした後だと、仲間から外集団メンバーに危害を加えるよう頼まれたときの承諾率が高くなったのである。それは、頼んできた相手が権威ある人物の場合（Wiltermuth, 2012a）だけでなく、同僚の場合（Wiltermuth, 2012b）でも同じ結果になった。

*21 裏付けとなる証拠が増えてくるにつれて、音楽が集団の結束を生む社会的結合創出メカニズムであり、その土台には自他の融合があるという考えが、ますます受け入れられてきている（Bannan, 2012; Dunbar, 2012; Harvey, 2018; Loersch & Arbuckle, 2013; Oesch, 2019; Savage et al., 2020; Tarr et al., 2014）。音楽が持つ、ときに喜劇的と言えるほどの結合機能に気づいているのは、

学者だけではない。以下の動画を見て笑わずにいるのは難しいだろう。www.youtube.com/watch?v=etEQz7NYSLg。4歳児の援助行動に関する研究は、Kirschner & Tomasello (2010) を参照。Cirelli et al. (2014) では、さらに幼い1歳2カ月の子どもを対象とした研究から、概念的に類似した結果が得られた。大人を対象としたある研究が、こうした援助行動の理由を示唆している。一緒に歌うことで、その相手との間に自他の融合の感覚が生じたのである (Bullack et al., 2020)。

- *22 Kahneman の著書『ファスト&スロー あなたの意思はどのように決まるか?』【訳注：村井章子訳 (2012) 早川書房】は、システム1思考とシステム2思考について余すところなく解説した情報源である。この2つのシステムを区別する妥当性の証拠は同書に記されているが、Epstein et al. (1992, 1999) も包括性のやや少ないかたちで証拠を提出している。「私の考えです」と「私の感じです」との対比についての証拠は、Clarkson et al. (2011) と Mayer & Tormala (2010) を参照。また、一般的な話として、考え方の土台にあるのが感情なのか合理性なのかを見極め、それと合致させるかたちで説得の議論を行うことの賢明さについては、Drolet & Aaker (2002) と Sinaceur et al. (2005) も、有益な情報を提供している。

- *23 多くの若い女性が、音楽は自分にとって服、映画、本、雑誌、コンピューターゲーム、テレビ、スポーツのどれより重要だとみなす一方で、恋愛より重要とは言えないと考えていることを示すデータと概説は Bonneville-Roussy et al. (2013) を参照。科学的証拠から、音楽とリズムが合理的プロセスとは無関係に働いているのは確かである (たとえば de la Rosa et al., 2012; Gold et al., 2013)。エルヴィス・コストロの言葉の出典は、Margulis の興味深い論文 (2010) である。この論文で彼女は、この問題に独自の

証拠を加えている。音楽作品（ベートーベンの弦楽四重奏の抜粋）を聴かせるのに先立って、聴衆に楽曲の構造的情報を提供すると、楽曲を聴く楽しみが減じることを示したのである。最近40年間のポピュラーソングを扱った研究では、全楽曲のうち80%が恋愛か性的なテーマ、もしくはその両方を歌っていることが分かった (Madanika & Bartholomew, 2014)。フランスで実施されたギターケースの実験 (Gueguen et al., 2014) で、電話番号を聞き出せた割合は次のようになっている。持っていたのがギターケースだった場合は31%。スポーツバッグだった場合は9%、何も持っていなかった場合は14%。広告の成功に及ぼす音楽の効果に関する Armstrong の説明は、2010年の著作の271-272頁に載っている。

- *24 Catron による『ニューヨーク・タイムズ』紙の記事はウェブサイト (www.nytimes.com/2015/01/11/fashion/modern-love-to-fall-in-love-with-anyone-do-this.html) を参照。また、この記事の最後には36の質問へのリンクもある。Aron へのインタビュー (www.huffingtonpost.com/elaine-aron-phd/36-questions-for-intimacy_b_6472282.html) も参照。Catron がエッセイの土台に使った科学論文は、Aron et al. (1997) である。36の質問を交互に答えていくという返報性を備えた特徴の機能的重要性を裏付ける証拠については、Sprecher et al. (2013) を参照。この手法に多少の改良を加えたものが民族集団間の偏見の軽減に用いられている。また、元々の考えに強い偏りのある人々の偏見を軽減するためにも使われている (Page-Gould, Mendoza-Denton & Tropp, 2008)。

- *25 おそらく、エルンスト・ヘスを巡る一連の出来事の最も有益な研究は、歴史家 Mauss のもの (2012) である。彼女はゲシュタポの公式ファイルの中からヒムラーの「保護を要請する手紙」を発

見し、他の書類と付き合わせて裏付けをとった。ヒトラーが個人的にヒムラーに指示を出して手紙を書かせたのか、それとも、ヒトラーの補佐官だったフリッツ・ヴィーデマンがヒトラーの代わりに指示を出したのかについては、学者の間で意見が分かれている。ヘスへの特別保護は1年しか続かなかった（その後は戦争が終わるまで、さまざまな強制労働を課せられ、労働キャンプ、建設会社、水道整備会社などで使役された）ものの、他の家族のように絶滅収容所送りにされることはなかった（彼の姉はアウシュビッツでガス室送りになっている）。戦後、ヘスは鉄道会社の重役になり、最終的にはフランクフルトで西ドイツ国鉄の総裁まで上り詰めた。そして同地で1983年に没した。ボストンマラソン爆弾テロ事件の後、苦しみの共有が内集団のアイデンティティの融合に及ぼす効果を分析した研究者たちは、北アイルランドの統一派と共和派の長期にわたる紛争の効果について同様の分析を実施し、同様の結果を得た (Jong et al., 2015)。両手を氷水に浸すことの効果を示した研究では、他にも苦痛を生む手続を用いて、その効果を実証している。用いられたのは、集団の他の成員と一緒に唐辛子を食べたり、スクワットをしたりといった作業だった (Bastian et al., 2014)。さらに、苦難の共有が、アイデンティティの混同と、その後の協力的で自己犠牲的な振る舞いを引き起こすのに果たしている役割についての研究は、Drury (2018) と Whitehouse et al. (2017) を参照。集合的な感情という概念が、個人の感情という概念と性質を異にしていることを示す概説については、Goldenberg et al. (2020) と Parkinson (2020) を参照。アイルランド人とネイティブ・アメリカンの結びつきに関する一連の出来事をさらに詳しく知りたければ、さまざまなニュース記事（たとえば、www.irishpost.com/news/irish-donate-native-american-tribes-hit-covid-19-repay-173-year-old-favour-184706;

<https://nowthisnews.com/news/irish-repay-a-173-year-old-debt-to-native-community-hard-hit-by-covid-19> を参照）や、非常に有益なポッドキャスト『ジ・アイリッシュ・パスポート』のエピソード（www.theirishpassport.com/podcast/irish-and-native-american-solidarity）に当たるのがよいだろう。「涙の道」という経験の悲惨さをうかがわせる、あまり知られていない事実がある。チョクトー族の族長の使った表現からとられたその言葉の本来の形は、「涙と死の道」だったのである（Faiman-Silva, 1997, p. 19）。

- *26 Leopold のマニフェスト『野生のうたが聞こえる』は1949年に出版され、それ以来、多くの自然保護団体必読の入門書となっている。同書に、彼のカワカバとストローブマツを巡る思考を取り上げた部分が載っている（1989年に出版されたペーパーバック版の68-70頁【訳註：邦訳版（講談社学術文庫）では116-120頁】）。自然管理が最もよくできるのは、生態系を中心に据えたやり方であって人間中心的なやり方ではない、という彼の強い信念がはっきりと表れているのは、捕食動物を管理しようとする政府の自然環境政策に異を唱えている箇所である。驚くべき証拠が、捕食動物であるオオカミの事例における彼の見解を支持している。その証拠の視覚的資料はウェブサイト（www.distractify.com/wolves-change-rivers-1197626599.html【訳註：残念ながら同サイトは本書初版刊行時点では見られなかった】）を参照。きっと見てよかったと思うはずだ。

- *27 イケア効果の研究については Norton et al. (2012) を参照。共同制作を行った相手と制作された品への評価に関する研究は、Pfeffer と実施した（Pfeffer & Cialdini, 1998）。Pfeffer は私の知っている中で最も素晴らしい研究者の一人である。共同作業が3歳児の分配行動に及ぼした効果については、Warneken et

al. (2011) を参照。協同学習という技法の肯定的な結果のまとめは Paluck & Green (2009) と Roseth, et al. (2008) を参照。そうした手法の一つ (Aronson とその共同研究者たちが開発した「ジグソー教室」) の導入法に関する情報を探している教育関係者は、彼らのウェブサイト (www.jigsaw.org) を訪問してほしい。顧客にアドバイスを求めることが、その後の顧客の関与に及ぼす効果の研究については、Liu & Gal (2011) を参照。追加情報として、この研究では顧客のアドバイスに対して予想外に高額な謝礼を払った場合、そのブランドに対する好意の高まりはすっかり消えてしまうことも分かっている。著者たちはそうなる理由を調べてはいないが、予想外の謝礼が、実験参加者の注意をアドバイスの提供が持つ協力的側面からそらし、個別化の側面 (この例で言えば、金銭的交換と結びついた彼ら自身の経済的結果) へ向けたのではないかと推測している。さまざまなブランドが共同制作の手法を取り入れて顧客の関与を促している例は、www.visioncritical.com/5-examples-how-brands-are-using-co-creation と、その中の 2 つのリンク (www.visioncritical.com/cocreation-101 と www.greenbookblog.org/2013/10/01/co-creation-3-0) を参照。さまざまなブランドが共同制作の手法を用いて顧客のアイデンティティとブランドを結びつけようとするのには、もっともな理由がある。あるブランド (たとえば、アップル) との間にアイデンティティの共有を強く感じている顧客は、そのブランドに対する態度や忠誠度を決めるときに、そのブランドの製品の欠点に関する情報を無視しやすいのだ (Lin & Sung, 2014)。

- *28 さまざまな種の個体がどのようにして近親性を見定めているのかという問いを主題とした科学研究はたくさんある (たとえば、Holmes, 2004; Holmes & Sherman, 1983; Mateo, 2003)。このプロセスに人間がどう取り組んでいるかという研究は、比べ

ると数は多くないものの、本書の目的にとっては特に有益である (Gyuris et al., 2020; Mateo, 2015)。たとえば、Wells (1987) では、どんな文化にも「名誉家族」(血縁はないが同じ家に暮らし、その結果家族的な称号を得る人) という概念が存在すると報告されている。非常に有益な知見としては、Lieberman らが行った人間の近親性検出法の画期的な分析 (Lieberman et al., 2007; Sznycer et al., 2016) と、それを簡潔にまとめた Cosmides & Tooby (2013, pp.219-22) を参照。外集団の人を自宅に招き、客人としてではなく家族として扱うという、私が親たちに推奨したやり方の裏付けは、大人が社会的集団の成員に対して発する非言語的シグナルを子どもが真似ていることを示す研究 (Skinner et al., 2020) である。

- *29 多様性のある地域で暮らすことが、見知らぬ人への善意や人類の一員という意識に及ぼす肯定的な効果を示すデータについては、Nai et al. (2018) を参照。広い意味で同様の効果は、民族的多様性が豊かな地域や国でも見つかっている (Bai et al., 2020)。マジョリティ集団、マイノリティ集団のどちらの成員であっても、集団の垣根を越えた友情が他集団への考え方、期待、行動に好結果をもたらすことは、多くの研究が裏付けている (Page-Gould et al., 2010; Pettigrew, 1997; Swart et al., 2011; Wright et al., 1997)。たとえば、南アフリカにおける研究では「有色人種」の中学生在が白人と集団の垣根を超えた友情を育んでいると、白人全般を信頼しようという考えが強くなり、敵意を向けることが少なくなった (Swart et al., 2011)。強い偏見に囚われた考えの持ち主から偏見を減らすための36の質問を開発したのは、Page-Gould et al. (2008) である。集団の垣根を超えた友情の有益な効果に自己開示が果たす重要な役割については、Davies et al. (2011) と Turner et al. (2007) を参照。

- *30 米国人というアイデンティティが持つ結合効果については、Riek et al. (2010) と Levendusky (2018) を参照。遺伝的アイデンティティが同様の効果を持つことの裏付けについては、Kimel et al. (2016) を参照。共通の敵というものに備わる同様の効果については、Flade et al. (2019) と Shnabel et al. (2013) を参照。共通したアイデンティティの効果がサイコパスにも生じることを示す研究については、Arbuckle & Cunningham (2012) を参照。McDonald et al. (2017) の提出した証拠によれば、敵対する集団を非人間化するという、集団に備わった嘆かわしい傾向 (Haslem, 2006; Haslam & Loughnan, 2014; Kteily et al., 2015; Markowitz & Slovic, 2020; Smith, 2020) は、基本的な人間的感情の共有を通じて弱めることができる。相手の立場になって考えることが、相手との自他の重なりを促進するという証拠はたくさんある (Ames et al., 2008; Čehajić & Brown, 2010; Davis et al., 1996; Galinsky & Moskowitz, 2000)。特に独創的な裏付けを提供しているのが、Ames et al. (2008) の研究である。同研究では、相手の立場になって考えるとき、自分自身について考えることと結びついた脳の領野 (前頭前皮質) の活動が活発になることが示された。相手の立場に身を置くことで、さまざまなマイノリティ集団に好意的な政策に賛成の気持ちが強まることを示した研究については Berndsen & McGarty (2012), Čehajić & Brown (2010), Broockman & Kalla (2016) を参照。相手がこちらの立場になって考えているという認識が、その人物との結びつきの感覚を強めるという発見は、Goldstein et al. (2014) の実施した6つの個別の実験から得られた。
- *31 波, 葉, 花の引用は、たいていセネカの言葉とされているが、そうではないかもしれない。言葉の出所として最も有力な候補は、バハイ教の創始者バハオラである。共通の敵を目立たせた

り、共通する何らかのアイデンティティを見つけたり、相手の立場になって考えたりすることで、敵対集団に対する非人間化を弱めたり、集団間の一体感を持たせたりすることを意図したつながりの作り方はさまざまある。しかし、多くの証拠によれば、それらは常に成功するわけではなく、効果が一時的であることも少なくない (Catapano et al., 2019; Dovidio et al., 2009; Goldenberg et al., 2020; Lai et al., 2016; Mousa, 2020; Over, 2020; Sasaki & Vorauer, 2013; Todd & Galinsky, 2014; Vorauer et al., 2009)。多くの研究が、脅威の認知が一体性を生み出す手法の効果を弱めることを実証している (Gómez et al., 2013; Kauff et al., 2013; Morrison et al., 2010; Pierce et al., 2013; Riek et al., 2006; Sassenrath et al., 2016; Vorauer & Sasaki, 2011)。

- *32 家族、友人、地元や、政治的・宗教的態度を同じくする人の間では、より大きな遺伝的重なりが見込めるという証拠の概説については、本章の註9, 12, 14, 16, 17を参照。Kahnemanが焦点錯覚の基礎とした最初の研究は、Schkade & Kahneman (1998)で報告された。その後の裏付けについてはGilbert (2006), Krizan & Suls (2008), Wilson et al. (2000) と、Wilson & Gilbert (2008)を参照。関連したデータが、さまざまなブランドが店の棚にずらりと並ぶ中で、中央に置かれた商品が他の商品より売れる理由を調べた研究で得られている。中央にある商品は、左右に位置する商品よりも視覚的な注意を集める。さらに、その大きな注目こそが、購入の意思決定の先触れとなっているのである (Atalay et al., 2012)。焦点錯覚の全般的な原理とその帰結に関して言うと、重要なものは私たちの注意を引き、私たちが注意に向けたものはその重要性を増すという証拠がある。たとえば、態度の研究領域では、私たちの認知は、最も容易に接近可能な（つまり簡単に関心を向けられる）態度が、私たちにとって最も重要で

あるとみなすようにできていることが、研究によって示されている (Bizer & Krosnick, 2001)。同様に、どんな態度であっても容易に接近可能な場合には、より重要だとみなされるようになる (Roese & Olson, 1994)。さらに、ある消費財に視覚的注意が集中すると、価値判断を担当している脳の部位が影響され、その消費財に与える価値が高まるという証拠もある (Lim et al., 2011; Krajchich et al., 2009)。報道の量、ウェブサイトのトップページ画像、年を取らせた写真を扱って注意の焦点化が重要性の認識に与える影響を実証した研究は、それぞれ Corning & Schuman (2013), Mandel & Johnson (2002), Hershfield et al. (2011) を参照。すべての手法が有効だと証明されたわけではないが、かなり多くの研究が示すところによれば、訓練によって注意を脅威的な考えから逸らし、より肯定的な、少なくともそれほど脅威を感じない考えに向けることは可能である (Hakamata et al., 2010; Mogg et al., 2017; Lazarov et al., 2017; Price et al., 2016)。自己訓練によって、外集団の、ときに脅威的な側面から注意を逸らすこと以外にも、結果として生じる不安を減らすために焦点化を利用するやり方はある。不安自体から注意を逸らして自分たちの強みに注意を向けるのである。脅威にさらされるとき、大事なものは「自己肯定」を行い、自分に備わっていて価値を感じるもの (家族、友人との強固な関係や、友人のネットワークなど) に注意を向けることである。またそれは、自分が重視している特質 (創造性やユーモアのセンスなど) になることもある。こうする効果は、私たちの注意を自分自身の、脅威にさらされている側面と、それに伴う防衛的反応 (偏見、喧嘩腰の態度、自己宣伝) から逸らし、自分の価値ある側面とその結果生じる自信に満ちた反応 (大らかさ、落ち着き、自制) へと向け直すところにある。数多くの研究から、タイミングの良い自己肯定には外集団の脅威がもた

らす負の影響を打ち消す力があることが分かっている（Čehajić-Clancy et al., 2011; Cohen & Sherman, 2014; Shnabel et al., 2013; Sherman et al., 2017; Stone et al., 2011）。

- *33 一体感を強調した文言で行動規範が書かれている企業のほうが従業員の不正行為が多いことを実証した研究については Kouchaki et al. (2019) を参照。仲間の不正行為を容認するという「私たち」集団の傾向は、人間だけのものではない。別の研究では、大人のチンパンジーが若い個体に食べ物を盗まれた場合、その個体が家族の一員だと、対応が著しく甘くなった (Frohlich et al., 2020)。証明された非倫理的行為に対しては厳罰で臨むという方針の賢明さは、組織内のそうした振る舞いを許容することによる経済的損失を示す証拠を見れば理解できる。そうした損失を同僚たちと私は、「組織の不誠実から生まれる三重腫瘍構造」と名付けた。私たちの主張は次のようなものだ。社員による（同僚、消費者、顧客、株主、納入業者、卸業者などへの）詐欺的な戦術の使用を放任している組織には、いずれ必ず高くつく結果が3つ生じる。従業員の低調な仕事ぶり、高い離職率、そして従業員による詐欺的行為と違法行為の蔓延である。しかもこれは、腫瘍と同じように進行し、転移し、組織の健康と活力をむしばんでいく。私たちは一連の研究、文献調査、分析を行う中で、自説の裏付けを発見した (Cialdini, 2016, chap. 13; Cialdini et al., 2021; Cialdini et al., 2004)。組織内の倫理規定違反に解雇処分で臨むという厳罰方針は、特に一体感を大事にする組織からすると無慈悲に思われるかもしれないし、私自身、人間のやり取りにおいて無慈悲を支持したことはただの一度もないのだが、私たちの発見に基づくなら、この対応は正当化できそうに思う。もちろん、寛容を強調した反論や、間違えるのが人間であり、人はやり直すチャンスを与えられるべきであるという反論、それにシェイクスピア

が『ヴェニスの商人』で倫理違反を犯した人間の扱いに関して書いた台詞「慈悲は義務によって強制されるものではない、／天より降りきたっておのずから大地をうるおす／恵みの雨のようなものなのだ（小田島雄志訳）」を引き合いに出すような反論があるのは分かっているし、そうした意見には共感さえ覚える。しかし、職場での非倫理的行為についてのみ言えば、私は（シェイクスピアとは違い）破壊的な結果と伝染性のある結果がセットで生じることを実証した研究をたくさん見てきたため、それを過小評価するわけにはいかないのである。